기조강연

한일관계의 과거와 현재 (日韓關係の過去と現在)

木村直也(기무라 나오야, 日本 立教大)

들어가며

1. 전근대대외관계사연구회와 한일관계사학회
2. 에도시대의 일본과 조선왕조
3. 막말유신기에서의 조일관계의 전회(轉回)
4. 근년의 한일관계
5. 쓰시마

나오며

【基조강연】

日韓關係の過去と現在

木村直也(日本 立教大)

はじめに

韓日關係史学会が創立30周年を迎えられたことに、心よりお慶び申し上げます。また、この30年間、月例発表会・学術会議・国際学術シンポジウムなどを継続的に開催し、有意義な活動を精力的に展開して学界を牽引されてきたことに、多大な敬意を表します。

1. 前近代対外關係史研究会と韓日關係史学会

日本では、前近代対外關係史研究会（通称「対外史研」）が40年余り活動を続けている。対外史研は、1977年に東京大学史料編纂所教授であった田中健夫先生を代表として、同所に勤めていた対外關係史研究者（荒野泰典・村井章介・石井正敏・加藤榮一ら）が中心となって始まった。史料編纂所で研究会を開催し、各方面から研究者が参加した（私自身は1981年から参加）。この会は、学会として組織化することなく、ゆるやかな集まりであった。出身大学、年齢、国籍などを問わずに自由に参加・発表できる研究会で、若手研究者も発表の機会を与えられ、偉大な研究者たちと接することができた。対外史研は、1983年の歴史学研究会大会における荒野泰典報告を支援・準備し、同氏による「鎖国」の見直し、海禁・華夷秩序論を生み出した。また、田中先生の60歳の東大退官、70歳の東洋大退職を契機とした論集作成のために研究発表会を開き、その成果は田中健夫編『日本前近代の国家と対外關係』（吉川弘文館、1987年）と『前近代の日本と東アジア』（吉川弘文館、1995年）に結実した。

この対外史研と双生児的な関係にあるのが、1978年に発足した朝鮮王朝実録（李朝実録）を読む会である。豊臣秀吉の朝鮮侵略を研究する北島万次先生が中心となり、秀吉の侵略が始まった1592年（宣祖25年、文禄元年）から「宣祖実録」を読み始め、東大史料編纂所を会場として、ほぼ隔週で開かれた。実録を読む会は、その日の担当者が分担部分について、まず全文を読み下したうえで口語訳を付けていくという地道なもので、ほぼ10年間で1年分の記事を読んでいくペースであった（現在、宣祖29年11月まで読了）。

対外史研と実録を読む会には、東京周辺の大学に留学していた各国からの留学生たちも参加し

た。とりわけ韓国からはたいへん多くの方々に参加され、その方々はその後、韓日関係史学会の活動を担っておられ、また歴代会長にも多くその名が見いだせる。

その後、前近代対外関係史研究会（朝鮮王朝実録を読む会）と韓日関係史学会とは、それぞれ創立から区切りのよい年に記念シンポジウムを開催し、相互交流をしている。例えば、2007年（対外史研30周年）の「アジアのなかの日朝関係史」（九州国立博物館、朝鮮通信使400年記念国際シンポジウム）や、2012年（韓日関係史学会20周年）の「朝鮮時代の韓国と日本」（江原大が校）が開催され、他にもいくつか国際シンポジウムが開かれている。それらの機会に日韓双方の研究者たちが議論を交わしたが、いずれも実証的な研究成果に基づき、同じ基盤に立って議論しつつ、相互の認識を確認し合うよい機会となった。また、対外史研・実録を読む会のメンバーたちは、韓日関係史学会の方々と共同で、韓国での史跡調査旅行をたびたび行った。韓国側のご協力により充実した踏査となるとともに、酒席でも賑わい、若手を含め、研究者どうしの豊かな交流を経験することができた。こうした機会による両国研究者の交流の意義は大きかったと痛感する。

さて対外史研は、初期の頃は論集準備もあったので毎月のように開かれていたが、近年は報告希望者があれば開く形なので、年数回の開催になっていた。さらに2020年以降は、新型コロナウイルス感染で東京大学が使用できないことにより、対外史研・実録を読む会ともに休止を余儀なくされ、オンライン開催にも踏み切れないまま現在に至っている。確固たる学会組織である韓日関係史学会とは異なり、ゆるやかな集まりであるがゆえの弱点なのかもしれない。

2. 江戸時代の日本と朝鮮王朝

江戸時代（朝鮮時代後期）の日本と朝鮮王朝との関係は、かつては「鎖国」のもとでの例外的なものとして扱われ、一般の人々の関心はほとんど希薄だったが、1970年代から通信使などによる豊かな交流や貿易の実態が明らかにされ、しだいに注目されるようになった。前近代対外関係史研究会が発足したのは、まさにそうした時期である。1980年代になると荒野泰典氏やロナルド・トビ氏らが「四つの口」の存在を踏まえ、江戸時代は「鎖国」とは言えないとの論を提起した。現在、少なくとも日本近世史研究者においては、単純な国際的孤立としての「鎖国」認識をもつ者はおらず、日朝関係も日本の幕藩体制、あるいは東アジア国際関係に構造的に組み込まれたものと捉えるのが一般的である。学校教科書でも、いまだ「鎖国」という表現を残しているものの、江戸時代の日朝関係についてページを割いて説明している。近年では、さらに近世日朝関係の精緻な研究が進められつつ、荒野説への批判・修正の議論もみられる。

そうした状況の中で、江戸時代の日朝関係に関する書籍も多数刊行され、一般の人々にも豊かな日朝交流への理解が広がっていった。「二千年余りにわたる日朝関係の歴史では、むしろ平和的な関係の方が長い」とする、歴史の再発見をもたらすような認識も生まれた。ただ留意すべきは、江戸時代の日朝関係をひたすら友好的であったとする単純な捉え方でよいのか、という点である。

この問題を考える例として、両国の友好的関係の象徴として取り上げられることが多い雨森芳

洲(あめのもりほうしゅう)(1668~1755)についてみてみたい。

芳洲は、対馬藩に仕えた儒者で、藩の文教のほか、朝鮮外交の文書・記録のことに携わり、2度の通信使に真文役として随行し、また釜山倭館での外交交渉に関与することもあった。みずから朝鮮語を学び、朝鮮通詞養成制度の創設や、『交隣須知』など朝鮮語習得のための教科書編纂にも尽力した。玄徳潤ら朝鮮側の訳官との人間的な交流もあったが、芳洲は熾烈な外交交渉の現場にも立っている。通信使一行として来日した申維翰との交流は有名だが、申維翰『海游録』の中には、通信使一行と対馬藩主との面会形式や、日本側が一行を京都の方広寺(豊臣氏が建立、近くに「耳塚」がある)に連れて行くことをめぐり、芳洲が朝鮮側と激烈に争ったことも記されている。

雨森芳洲の著作として有名な『交隣提醒』(1728年)は、朝鮮通交についての彼の意見を54項目にまとめて藩に提出したもので、従来の朝鮮通交のありかたや対馬藩人の朝鮮認識などについて、批判的な視点から具体的に論じている。同書全体で、相手の人情、時代状況、日本との政治体制・社会の違いを認識することが重要だと強調しているが、単に相手を理解すべきだと言っているのではなく、そうしないと外交が円滑に進まず、自分たちの利益を損ねるのだと訴えているのである。すでに「乱後之余威」(豊臣秀吉の侵略後に残る日本の威勢)が残っていない現状において、相変わらず朝鮮に強圧的な態度をとっても相手には通用せず、かえって不利益を蒙ることを随所で述べている。

『交隣提醒』の最終項目で述べられる「誠信之交」は、頻繁に引用され、広く知られて

いる。しかしこれは、単純な両国友好を謳ったものではない。この項目の冒頭には、「誠信之交」は人々がよく言うことであるが、多くはその字義が分かっていないとあり、そして「誠信と申し候は実意と申す事にて、互いに欺かず争わず、真実をもって交わり候を誠信とは申し候」と説明する。しかし、ほんとうに誠信の交わりを行うのであれば、対馬から使節を送り、日本人を手なづける意図による朝鮮からの恩恵を受けるような現状の通交形態を改めなければならないとする。しかしそれは容易に実現できないから、とりあえず従来通りの通交をしつつ実意(誠の心)を失わないようにし、朝鮮の書物や日朝通交の文書・記録を熟覧して、朝鮮の事情を詳しく知ったうえで対処すべきだと述べるのである。

ここから窺われるように、雨森芳洲は決してバラ色の理想論・友好論を述べているのではない。両国間の齟齬や困難な問題をよく理解したうえで、あるべき通交の姿を模索したのではなからうか。

同じような態度は、対馬藩の朝鮮通詞で、対馬易地聘礼(1811年)に向けての交渉に深く関わった小田幾五郎(おだいくごろう)の『通訳酬酢(=西+作)』にもみられる。この書は、対馬の通詞と朝鮮側訳官との会話の形をとり、朝鮮の地理・制度・文化などについて詳細に解説するとともに、日本と朝鮮との違いについても論じている。日朝通交の現場に立つ者は互いの事情や相違をよく理解していなければならない、という強い認識が窺われる。小田幾五郎は易地聘礼をめぐり交渉において、文書偽造を含めて朝鮮側訳官と結託したとされるのであるが、両国の要求が衝突する中で、何とか妥協点を探って通詞・訳官どうしが模索し、合意形成に尽力したのであろう。

要するに、江戸時代の平和的・安定的な日朝関係は、すべてが友好的に、かつ円滑に実現したわ

けでは決してない。つねに両国の利害と体面がぶつかり合うなかで、通交関係維持が図られたのである。日本と朝鮮が「唇齒」の関係にある隣国であればこそ、共通の価値観に基づく豊かな交流もある一方、互いの価値観の違いも露呈する。対馬藩宗氏は幕藩制国家の中で徳川将軍に臣従する大名であるが、朝鮮国王に朝貢しているかのような形式を伴いながら日朝通交を担っていた。そうしたことが屈辱的であり問題であるという認識も、対馬藩の内外で通奏低音のように存在していた。しかし、こうした矛盾・葛藤を抱えながらも、各方面の努力によって、両国関係は2世紀半にわたって平和的・安定的に維持されたのである。

3. 幕末維新时期における日朝関係の転回

幕末維新时期(19世紀半ば)になると日朝関係は、いわば「交隣」から「征韓」へと大きく転回する。こうした変化はどのようにして起こったのであろうか。大づかみに言えば、2つの要因がある。

まず、欧米列強の東アジア進出に伴い、対外意識が変化し、従来の国際関係の再編が意図されたことである。日本では、19世紀に入ると欧米諸国に対する警戒感・危機意識が高まり、従来の対外関係における4か国限定の状態を「鎖国」と呼ぶようになり、それとともに東アジア国際関係は相対的に軽視され、さらには欧米に対する日本防衛の観点から近隣諸国・地域への進出を構想する者が増えていった。1850年代に欧米諸国と条約を結んで開港すると、一時的に攘夷運動が活性化するが、開港・通商路線が優位に転じると、西洋近代国際関係に立脚しつつ、従来の東アジアにおける国際関係を再編することが図られた。開港・通商して間もない1861年に幕府の大目付(おおめつけ)・目付の上申書で日朝関係の方式を見直すことが主張されているのは、その早い例である。一方、同様に欧米列強の圧力を受けつつあった朝鮮では、1860年代から大院君政権がキリスト教弾圧を徹底しつつ、排外攘夷主義を明確に打ち出し、丙寅洋擾(1866年)・辛未洋擾(1871年)に対処した。

もう一つの要因は、日朝関係を担ってきた対馬藩の財政窮乏による態度の変化である。江戸時代中期以降、日本では金銀銅の輸出規制と輸入物資の国産化、国内市場の活性化により、「四つの口」における貿易の動向に変化がみられた。対馬藩による朝鮮貿易は公貿易中心で維持されるものの、私貿易は衰退傾向がみられ、対馬藩財政は窮乏化していった。18世紀以降、対馬藩はたびたび幕府から援助を受けながら日朝関係を維持したが、幕末になり、1861年にロシア艦ポサドニック号が半年にわたって対馬浅茅湾(あそうわん)の一部を占拠する事件が起きると、対馬防備の不備も露呈した。1862年に実権を握った尊王攘夷派は幕府に対して大型援助を要求するとともに、対馬が朝鮮米に頼っていることなど、従来の朝鮮通交のありかたを屈辱的だとしてその変革を訴え、さらに列強が朝鮮に進出する前に日本が押さえるべきだとする朝鮮進出論を提起した。その動きは、1867年に幕府が使節を朝鮮に派遣しようとした計画につながっていく。

1867年に幕府が倒れ、明治新政府が成立すると、対馬藩は木戸孝允らを通じて新政府に朝鮮通交刷新を建議し、その結果、対馬から送られた新政府樹立通告使節がもたらした書契(外交文

書)は、従来の形式を一方的に変えるものになった。その書契(予告書契を含む)は、日本の天皇に関して「皇」「勅」の文字を使って天皇と清国皇帝を等位に置き(=朝鮮を日本の下位に位置づけ)、対馬が朝鮮に臣属しているかのような形式を否定するものであったから、朝鮮は拒絶した。それを受けて日本の朝野で征韓論が高まっていき、日朝関係は転回してしまうのである。朝鮮は幕末以来の日本側の対応に猜疑心をいだき、また1873年の倭館前の掲示に見られるように、朝鮮は欧米諸国に接近した日本を否定的に捉えていた。結局、江華島事件を機に日朝修好条規が結ばれ(1876年)、そしてその後の動向とメディアの報道姿勢を通じて、日本の民衆の対朝鮮意識も変化していくことになる。

19世紀に東アジアを取り巻く国際的環境が大きく変化したことが背景となったとはいえ、一方の側の利益と論理を前面に出して行動することにより、平和的・安定的に維持されていた両国関係が劇的に悪化してしまったことを、心に刻んでおきたい。

4. 近年の日韓関係

1945年に日本が敗戦して植民地朝鮮(韓半島)が解放され、大韓民国が建国されたのち、日帝時代を中心とした歴史認識問題は日韓両国間で現在までもくすぶり続けてはいるが、日韓関係にはいくつか変化がみられた。

韓国では朴正熙・全斗煥の軍事政権ののち、経済発展・民主化が進んだ。金大中政権においては、小渕恵三(おぶちけいぞう)内閣との間で「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」が合意され(1998年)、大胆な文化輸出戦略が展開されて韓国文化が世界に進出していくとともに、韓国で日本文化が解禁されていき、サッカー・ワールドカップの日韓共催も実現した(2002年)。「日韓新時代」とさかんに言われ、日韓関係は良好化した。次の盧武鉉政権にかけては、日本で「冬のソナタ(キョウル・ヨンガ)」の大ヒット(2003~04年)を契機とした韓流ブームが起これ、日本では韓国のドラマ(現代物、歴史物)・映画・Kポップが人気を呼び、韓国語学習熱も高まり、東京新大久保のコリアタウンも栄えた。その後、韓流ブームは波を伴いながら現在まで続き、韓国文化の洗練・高度化は日本のみならず、広く世界で認められている。また韓国でも、日本のアニメやゲームが人気を呼び、日本語を学ぶ若者も増え、日本食・日本酒のブームも起きた。3年前までは多くの観光客が相互に訪問し合い(日本に登山に来る韓国人も多かった)、文化交流やスポーツ交流も活発であった。民衆レベルの交流は、確固たるものになっていたといえよう。前述した前近代対外関係史研究会と韓日関係史学会との交流をはじめ、両国間の歴史研究の学術交流もこの時期に急速に進展した。

しかし残念なことに、2012年頃から政治的な意味での日韓関係は悪化の方向に向かった。李明博政権の後半、第2次安倍晋三内閣発足の頃からである。朴槿恵政権と安倍内閣の間では慰安婦問題に関する合意も行われたが、文在寅政権と安倍内閣の間では日韓関係はいっそう悪化した。2019年には、徴用工に関する韓国大法院判決に対して日本政府が韓国への半導体素材など輸出手続を厳格化し、韓国はGSOMIAの破棄を決定するなど、日韓関係は「戦後最悪」と呼ばれるほど

に至った。実際に観光客の往復は減り、韓国では日本製品の不買運動も起こった。それに追い打ちをかけるように、2020年に入って新型コロナウイルスの感染拡大により、両国間の人の往来がほとんど無くなった。今年（2022年）に入って尹錫悦政権が発足し、両国関係の改善を目指す姿勢をみせているが、予断を許さない。

こうした政治的な両国関係の悪化にもかかわらず、民衆レベルの動向は異なるように思われる。コロナによって渡航が厳しく制限されていたが、今年になって韓国への入国条件が緩和されると、東京の韓国領事館にはビザ取得のために長蛇の列ができ、さらにビザ免除、入国前PCR検査免除と緩和が進むと、韓国への渡航を心待ちにしていた人々が渡航し始めている。私が教えている学生の中にも、観光渡航する学生のみならず、語学留学に韓国に渡った学生もいる。日本ではKポップファンが根強く存在し、韓国の食品・化粧品は相変わらず人気を呼んでおり、最近話題になった韓国映画・ドラマもさかんに視聴されている。私としては、こうした民衆レベルの交流に大きな期待と信頼をいただいている。

5. 対馬のこと

最後に、私が研究フィールドとし、たびたび訪れている対馬について話しておきたい。対馬は日本の九州と朝鮮半島（韓半島）との間にあり、古くから両国地域をつなぐ役割を果たしていた。日本の中では「国境の島」と位置づけられ、中央に依存する周縁・辺境的性格を有しているが、その一方で、境界領域として国家・民族を越えた交流の可能性をもつ境界的性格ももっていた。この両方の性格は、古代からずっと、時代の変化によって様相を変えながらも維持され、国家の権力が強大になった近現代になってもそれは変わらない。

戦後の対馬は、国境防衛のために自衛隊が駐屯し、また政府から離島振興のための特別予算を与えられて道路整備などが進められた。その一方で、1990年代から多くの韓国人観光客が訪れるようになり、対馬はそれを積極的に受け入れ、経済振興に寄与させようとしてきた。例えば、料理店の女将（おかみ）が韓国語を学び、韓国からの来訪客に日本舞踊を披露するといった努力もしていたし、韓国人相手のホテル、飲食店、物産店などもつくられていった。対馬市厳原（いずはら）にある対馬高校には国際文化交流科が設置され、韓国語を本格的に教えている。地元対馬の生徒だけでなく、日本各地から親元を離れて対馬に来て学ぶ生徒も多く、卒業後に韓国の大学に留学する生徒もいる。

江戸時代と同様、対馬は韓国と隣接しているがゆえに、豊かな交流の一方で種々の問題が生じることもある。2008年には、対馬の自衛隊施設の隣接地に韓国資本の観光施設が建てられたことをきっかけに、日本の保守系メディアが「対馬が乗っ取られる」キャンペーンを展開し、国会議員が乗り込んでくる事態にもなった。2020年の対馬市長選挙では、対馬が韓国人観光客に依存しないよう、原子力発電所廃棄物の受け入れ施設をつくって補助金を得るべきだと主張する右派系候補が島外からやってきた（落選）。また2012年には、対馬の小綱観音寺（こつなかのんじ）の仏像などが韓国人窃盗団によって盗まれる事件が起こった。犯人らは韓国で逮捕されて処罰された

が、この仏像の胎内に韓国の浮石寺でつくられたとする文があることから、浮石寺は中世に倭寇により奪われたものとして所有権を主張し、韓国の裁判所は、対馬に渡った経緯が証明されなければ仏像を対馬に返還しなくてよいとの判断をした。この一件は、対馬の人々に少なからぬ衝撃を与えた。

2018年には、人口約3万人の対馬に41万人の韓国人観光客が訪れていたが、前述のような2019年の日韓関係悪化により韓国人観光客が激減し、さらに翌年のコロナ禍で来訪韓国人はほぼゼロになった。こうした状況は対馬の経済に深刻な打撃を与えている。実際に対馬では、かつて厳原の街中にあふれていた韓国人たちの姿はなくて閑散としており、つぶれた店も散見される。いずれコロナ禍が収束したときに、韓国人観光客が復活することが期待されている。今年4月には対馬博物館も開館したので、みなさんの対馬訪問をお勧めしたい。

おわりに

江戸時代の日朝関係は、さまざまな矛盾・葛藤をかかえつつも、関係を維持しようとする力がまきっていたため、両国の関係者の努力により2世紀半にわたって平和的・安定的な関係が何とか維持された。しかし幕末維新时期には日本側で、従来の関係を変えて、みずからに有利な関係を築こうとする力がまさり、日朝関係は大きく転回した。為政者の態度が両国関係を方向づけ、そのことが民衆も縛っていくことになる。ひるがえって近年の日韓関係の急速な悪化を考えると、幕末維新时期の状況と重なって見えるのは私だけであろうか。ただ幕末維新时期と現在が大きく異なるのは、はるかに広範な民衆レベルの交流があることである。私としては、日韓関係の未来に向けて、そのことに期待をかけている。

この30年間、日韓の歴史研究者どうしの交流も格段に進んだ。交流機会の量的な拡大だけでなく、かつての議論に比べて、最近でははるかに精緻に、史料に基づく実証的研究の成果を踏まえた議論が展開されている。両国関係の現状と未来を考えるためにも、韓日関係史の研究から得られることは多い。今後の研究交流がよりいっそう進展することを心から期待している。

【기조강연】

한일관계의 과거와 현재

기무라 나오야(일본 릿쿄대)

들어가며

한일관계사학회가 창립 30주년을 맞이한 것을 축하드립니다. 더해 이 30년간, 월례발표회·학술회의·국제학술심포지엄 등과 같은 유의미한 활동을 정력적으로 전개하여 학계를 이끌어온 것에 대해 큰 경의를 표합니다.

1. 전근대대외관계사연구회와 한일관계사학회

일본에서는 전근대대외관계사연구회(통칭 「대외사연」)가 40년 남짓의 활동을 계속해오고 있다. 대외사연은 1977년에 도쿄대학사료편찬소 교수였던 다나카 다케오(田中健夫) 선생님을 대표로 하여 같은 장소에서 근무했던 대외관계사 연구자(아라노 야스노리(荒野泰典)·무라이 쇼스케(村井章介)·이시이 마사토시(石井正敏)·가토 에이이치(加藤榮一) 등)가 중심이 되어 시작되었다. 사료편찬소에서 연구회를 개최하여 각 방면에서 연구자가 참가했다(본인은 1981년부터 참가). 이 모임은 학회로서 조직화되지 않고, 느슨한 모임이었다. 출신대학·연령·국적 등을 불문하고 자유롭게 참가 및 발표를 할 수 있는 학회이며, 젊은 연구자도 발표의 기회를 부여받아 위대한 연구자들과 접촉할 수 있는 기회가 되었다. 대외사연은 1983년의 역사학연구회대회에서 있었던 아라노 야스노리 보고를 지원 및 준비하고, 그의 「쇄국(鎖国)」을 검토하여 해금(海禁)·화이질서론(華夷秩序論)을 탄생시켰다. 또한, 다나카 선생님의 60세 도쿄 퇴관, 70세 토요대 퇴직을 계기로 한 논집 작성을 위해 연구발표회를 열어 그 성과로 다나카 다케오 편 『일본 전근대의 국가와 대외관계(日本前近代の國家と對外關係)』(吉川弘文館, 1987)와 『전근대의 일본과 동아시아(前近代の日本と東アジア)』(吉川弘文館, 1995)를 결실로 맺었다.

이 대외사연과 쌍둥이의 관계로 있는 것이 1978년에 발족한 조선왕조실록(朝鮮王朝實錄)을 읽는 모임이다. 도요토미 히데요시(豊臣秀吉)의 조선침략을 연구하는 기타지마 만지(北島万次) 선생님이 중심이 되어 히데요시의 침략이 시작된 1592년(선조 25년, 분로쿠(文祿) 원년)부터 『선조실록(宣祖實錄)』을 읽기 시작하여 도쿄대학사료편찬소의 회장으로, 거의 격주로 열렸다. 실록을 읽는 모임은 그날의 담당자가 분담부분에 대해 먼저 전문을 훑어본

뒤에 현대어로 번역을 착실하게 했으며, 거의 10년 동안 1년 분량의 기사를 읽어가는 속도가 되었다(현재 선조 29년 11월까지 완료).

대외사연과 실록을 읽는 모임은 도쿄 주변 대학에 유학하고 있던 각국으로부터 온 유학생들도 참가했다. 특히 한국에서는 대단히 많은 분들이 참가하여, 이후 그분들은 한일관계사학회의 활동을 하고 계시며, 역대회장에서도 많은 분들을 찾을 수 있다.

그 이후 전근대대외관계사연구회(조선왕조실록을 읽는 모임)와 한일관계사학회는 각각 창립부터 구분하기 좋은 해에 기념심포지엄을 개최하여 상호교류를 하고 있다. 예로 들면, 2007년(대외사연30주년)의 「아시아 속의 조일관계사」(규슈국립박물관, 조선통신사 400년 기념 국제심포지엄)이나 2012년(한일관계사학회 20주년)의 「조선시대의 한국과 일본」(강원대학교)이 개최되었고, 그 외에도 몇 가지의 국제심포지엄이 열리고 있다. 그러한 기회에 한일 양방의 연구자들이 의논을 교환했지만, 모두 실증적인 연구성과에 기초하여 같은 기반에 있는 의논을 하면서 상호인식을 확인하는 좋은 기회가 되었다. 또한 대외사연·실록을 읽는 모임의 인원들은 한일관계사학회분들과 함께 한국에서의 사적조사 여행을 자주 갔다. 한국 측의 협력으로 충실했던 답사가 되었던 동시에 술자리도 활기찼으며 젊은 분들을 포함해, 연구자들 사이의 활발한 교류를 경험할 수 있었다. 이러한 기회로 양국 연구자의 교류의식은 컸다고 통감한다.

그리고 대외사연은 초기 무렵은 논집 준비도 있었기에 거의 매달 열리고 있었지만, 근래에는 보고희망자가 있다면 여는 형태로 1년 몇 번의 개최하는 것으로 되었다. 게다가 2020년 이후에는 신형 코로나바이러스 감염으로 도쿄대학을 사용할 수 없게 됨에 따라 대외사연·실록을 읽는 모임과 함께 휴지(休止)를 피할 수 없게 되고, 온라인 개최로 끊이지 않고 현재에 이르고 있다. 확고한 학회 조직인 한일관계사학회와는 달리, 느슨한 모임이기 때문인 약점인지도 모르겠다.

2. 에도시대의 일본과 조선왕조

에도시대(조선후기)의 일본과 조선왕조의 관계는 일찍이 「쇄국」 아래에서의 예외적인 것으로 취급되어 일반 사람들의 관심은 거의 희박했지만, 1970년대부터 통신사와 같은 것에 의한 활발한 교류나 무역의 실태가 밝혀져 점차 주목받게 되었다. 전근대대외관계사연구회가 발족한 것은 바야흐로 그러한 시기였다. 1980년대가 되면 아라노 야스노리(荒野泰典)씨나 로널드 토비(ロナルド·トビ)씨 등이 「4개의 창구」의 존재를 근거로 에도시대는 「쇄국」 이라고 말할 수 없다는 견해를 제기했다. 현재 적어도 일본 근세사연구자에 있어서는 단순한 국제적 독립으로서의 「쇄국」 인식을 가진 사람은 없으며, 조일관계도 일본의 막번체제 아니면 동아시아 국제관계에 구조적으로 편입된 것으로 인식하는 것이 일반적이다. 학교 교과서에서도 아직 「쇄국」이라는 표현을 남겨두고 있기는 하지만, 에도시대의 조일관계에 대해 페이지를 나눠 설명하고 있다. 근래에는 더욱 근세 조일관계의 치밀한 연구가 진행되어 아라노 논설에 대한 비판·수정의 의논도 보인다.

그러한 상황 속에서 에도시대의 조일관계에 관한 서적도 다수 간행되어 일반 사람들에게도 풍부한 조일교류에 대한 이해가 퍼져 나갔다. 「2천여 년에 걸친 조일관계의 역사에 서는 오히려 평화적인 관계인 편이 길었다」 라고 하여 역사의 재발견을 가져오는 듯한 인식도 생겨났다. 다만 유의할 것은 에도시대의 조일관계를 오로지 우호적이었다고 단순한 인지하는 편이 좋은 것인가, 라는 점이다.

이 문제를 생각하는 예시로, 양국의 우호적 관계의 상징으로 거론되는 경우가 많은 아메노모리 호슈(雨森芳洲, 1668~1755)에 대해 보고자 한다.

호슈는 쓰시마번에 종사한 유학자로, 번의 문교(文教) 외에 조선외교문서·기록에 대해 종사하고 2번의 통신사 진문역(眞文役)으로서 수행하였으며, 또한 부산 왜관(倭館)에서의 외교교섭에 관여한 바도 있다. 스스로 조선어를 배우고 조선통사 양성제도의 창설이나 『교린수지(交隣須知)』 등 조선어 습득을 위한 교과서 편찬에도 힘썼다. 현덕윤(玄德潤) 등 조선 측의 역관과의 인간적인 교류도 있었지만, 호슈는 치열한 외교교섭의 현장에도 서 있었다. 통신사 일행으로서 일본에 온 신유한(申維翰)과의 교류는 유명하지만, 신유한의 『해유록(海游錄)』에서는 통신사 일행과 쓰시마번주와의 면회형식이나 일본 측이 일행을 교토의 호코지(方廣寺 ; 도요토미가 건립, 근처에 귀무덤(耳塚)이 있음)에 데리고 가는 것을 둘러싸고 호슈가 조선 측과 격렬한 다툼을 한 것도 기록되어 있다.

아메노모리 호슈의 저작으로 유명한 『교린제성(交隣提醒)』(1728년)은 조선 통교에 대한 그의 의견을 54항목으로 정리하여 번에 제출한 것으로, 종래의 조선 통교의 방식이나 쓰시마번 사람의 조선인식에 대해 비판적인 시점에서 구체적으로 논하고 있다. 같은 책 전체에서 상대의 인정, 시대상황, 일본과의 정치체제·사회의 차이를 인식하는 것이 중요하다고 강조하고 있지만, 단지 상대를 이해해야 한다고 말하는 것이 아니라 그렇게 해야 외교가 원활하게 진행되고 자신들의 이익을 줄일 수 있는 것이라고 호소하고 있다. 이미 「난 후의 남은 위세」(도요토미 히데요시의 침략 후에 남은 일본의 위세)가 남아있지 않은 현상에 대해 여전히 조선에 강압적인 태도를 취해도 상대에는 통용되지 않고 돌아와서 불이익을 받는 것을 곳곳에서 서술하고 있다.

『교린제성(交隣提醒)』의 최종항목에서 서술되어 있는 「성신지교(誠信之交)」는 빈번하게 인용되어 널리 알려져 있다. 그러나 이것은 단순히 양국 우호를 주장하고 있는 것이 아니다. 이 항목의 서두에는 「성신지교(誠信之交)」는 사람들이 잘 언급하는 것이지만, 대체로는 그 한자의 뜻을 이해하지 못하고, 「성신이라고 하는 것은 진실된 마음(實意)이라는 뜻을 가지고 있으며, 서로 속이지 않고 다투지 않으며 진실을 가지고 교제하는 것을 성신이라고 한다」고 설명한다. 그러나 정말로 성신의 교제를 행하는 것이 있다면, 쓰시마에서 사절을 보내 일본인을 포섭하려는 의도에 따라 조선에서의 은혜를 받는 것과 같은 현상의 통교형태를 고쳐야만 한다고 한다. 그러나 그것은 쉽게 실현할 수 없으니, 일단은 종래대로의 통교를 진행하는 실의(정성의 마음)를 잃지 않도록 하여, 조선의 도서나 조일통교의 문서·기록을 자세히 살펴보고, 조선의 사정을 자세하게 안 뒤에 대처해야 한다고 서술하는 것이다.

여기에서 엿볼 수 있듯이, 아메노모리 호슈는 결코 장밋빛의 이상론·우호론을 서술하고

있는 것이 아니다. 양국 사이에 뜻이 맞지 않거나, 곤란한 문제를 잘 이해한 뒤에, 있어야 할 통교의 모습을 모색하는 것이 아닐까.

같은 태도는 쓰시번의 조선통사로 쓰시마역지빙례(1811년)를 위한 교섭에 깊게 관여되었던 오다 이쿠로로(小田幾五郎)의 『통역수작(通驛酬酌)』에도 보인다. 이 책은 쓰시마 통사와 조선측 역관과의 대화의 형태를 가지고, 조선의 지리·제도·문화 등에 대해 상세히 해설함과 동시에, 일본과 조선의 차이에 대해서도 논하고 있다. 조일통교의 현장에 있던 사람은 서로의 사정이나 차이를 잘 이해해야만 한다는 강한 인식을 엿볼 수 있다. 오다 이쿠고로는 역지빙례를 둘러싼 교섭에 대해 문서위조를 포함해 조선측 역관과 결탁한 것으로 되어 있지만, 양국의 요구가 충돌하는 중에 그럭저럭 타협점을 찾아 통사·역관끼리 모색하여, 합의 형성에 최선을 다하는 것이다.

요약하면, 에도시대의 평화적·안정적인 조일관계는 모든 것이 우호적이고 원활하게 실현된 것이 결코 아니다. 항상 양국의 이해와 체면이 부딪히는 중에 통교 관계유지가 도모하는 것이다. 일본과 조선이 「순치(脣齒)」의 관계에 있는 이웃나라로서 공통의 가치관에 기초하여 활발한 교류도 있는 한편, 서로의 가치관의 차이도 드러난다. 쓰시마번 소씨(宗氏)는 막번제 국가 속에서 도쿠가와 쇼군에 신종(臣從)한 다이묘이지만, 조선국왕에 조공하고 있는지와 같은 형식을 동반하면서 조일통교를 책임졌다. 그렇게 한 것이 굴욕적인 문제라는 인식도 쓰시번의 내외에 통주저음(通奏低音)처럼 존재했다. 그러나 이러한 모순·갈등을 포함하면서도, 각 방면의 노력에 의해 양국관계는 2세기 반에 걸쳐 평화적·안정적으로 유지되었던 것이다.

3. 막말유신기의 조일관계의 전회

막말유신기(19세기 중반)가 되면 조일관계는 말하자면 「교린(交隣)」에서 「정한(征韓)」으로 크게 바뀐다. 그러한 변화는 어떻게 하여 일어난 것일까. 대략 말하면 두 가지 요인이 있다.

먼저, 구미열강의 동아시아 진출에 따라 대외의식이 변화하여 종래의 국제관계의 재편이 의도되었던 것이다. 일본에서는 19세기에 들어서면서 구미제국에 대한 경계감·위기의식이 높아져, 종래 대외관계의 4개국 한정의 상태를 「쇄국」으로 부르게 되고 그와 동시에 동아시아 국제관계는 상대적으로 경시되고, 구미에 대한 일본방위의 관점에서 인근 모든 국가·지역으로의 진출을 구상하는 사람이 늘어났다. 1850년대에 구미제국과 조약을 맺어 개항하면서 일시적으로 양이운동이 활성화되지만, 개항·통상노선이 우위로 바뀌어 서양 근대 국제관계에 입각하여 종래의 동아시아에서의 국제관계를 재편하는 것이 도모되었다. 개항·통상한지 얼마 되지 않은 1861년에 막부의 오오메즈케(大目付)·메즈케(目付)의 상신서에서 조일관계의 방식을 재검토하는 것이 주장된 것은 그 예시이다. 한편, 마찬가지로 구미열강의 압력을 받고 있던 조선에서는 1860년대부터 대원군 정권이 크리스티교 탄압을 철폐하게 하고 배외양이주의를 명확하게 내세워 병인양요(1866년)·신미양요(1871년)로 대처했다.

또 한 가지의 요인은 조일관계를 담당해왔던 쓰시마번의 재정 궁핍에 의한 태도 변화이다. 에도시대 중기 이후, 일본에서는 금·은·동의 수출규제와 수입물자의 국산화, 국내시장의 활성화에 따라 「4개의 창구」를 통한 무역의 동향에 변화를 보였다. 쓰시마번을 통한 조선무역은 공무역 중심으로 유지되는 것으로, 사무역은 쇠퇴경향이 보여 쓰시마번 재정은 궁핍화되었다. 18세기 이후, 쓰시마번은 때때로 막부에서 원조를 받으면서 조일관계를 유지했지만, 막말이 되고 1861년에 러시아 함선 포사드니크호가 반년에 걸쳐 쓰시마 아소만 일부를 점거한 사건이 일어나고, 쓰시마 방비의 불비도 드러났다. 1862년에 실권을 쥐고 있던 존왕양이파는 막부에 대해 대형 원조를 요청함과 동시에 쓰시마가 조선 쌀에 의존하고 있는 것, 종래의 조선통교 자세를 굴욕적이었다 하여 그 변혁을 호소하고, 이에 더해 열강이 조선에 진출하기 전에 일본이 확보해야 한다고 하는 조선진출론을 제기했다. 그 움직임은 1867년 막부가 사절을 조선에 파견하려고 했던 계획과 이어져갔다.

1867년에 막부가 쓰러지고 메이지정부가 성립되면서 쓰시마번은 기도 다카요시(木戶孝允) 등을 통해 신정부에 조선 통교 쇄신을 건의하였고, 그 결과, 쓰시마에서 보낸 신정부 수립 통고 사절이 가져온 서계(외교문서)는 종래의 형식을 일방적으로 바꾸는 것으로 되었다. 그 서계(예고 서계를 포함)는 일본의 천황에 관해 「황(皇)」 「칙(勅)」의 문자를 사용해 천황과 청국황제를 같은 위치로 두고(=조선을 일본의 아래 위치로 둠), 쓰시마가 조선에 신하로 되어 있는 것인지와 같은 형식을 부정하고 있는 것이었기 때문에 조선은 거절했다. 그것을 받은 일본의 조야는 정한론이 높아져가, 조일관계는 바뀌게 되었던 것이다. 조선은 막말 이후의 일본 측의 대응에 시의심을 가져 다시 1873년의 왜관 앞의 알림판에 보이듯이, 조선은 구미제국에 접근한 일본을 부정적으로 인식하고 있었다. 결국, 강화도사건을 계기로 조일수호조규가 맺어지고(1876년), 그 후의 동향과 미디어의 보도 양상을 통해 일본의 민중의 대조선의식도 변화되어 가는 것이 된다.

19세기에 동아시아를 둘러싼 국제적 환경이 크게 변화한 것이 배경으로 되었다고는 해도, 한편으로는 이익과 논리를 전면으로 내세워 행동함에 따라 평화적·안정적으로 유지되었던 양국관계가 극적으로 악화되었던 것을 마음에 새겨두고 싶다.

4. 근년의 한일관계

1945년에 일본이 패전하여 식민지 조선(한반도)이 해방되어 대한민국이 건국된 후, 일제시대를 중심으로 하는 역사 인식문제는 일한 양국 사이에 현재까지도 풀리지 않으며 계속되고 있지만, 일한관계에는 몇 가지의 변화가 보였다.

한국에서는 박정희·전두환의 군사정권 중에 경제발전·민주화가 진행되었다. 김대중 정권에 들어서는 오부치 게이조(小淵惠三) 내각과의 사이에서 「21세기의 새로운 한일 파트너십 공동선언」이 합의되어(1998년), 대담한 문화수출전략이 전개된 한국문화가 세계에 진출하는 동시에 한국에 일본문화가 해금되어 축구·월드컵의 한일공동개최도 실현되었다(2002년). 「한일 신시대」라고 왕성하게 언급되며 한일관계는 양호해졌다. 다음의 노무현

정권에 들어서는 일본에 「겨울의 소나타(겨울연가)」의 대히트(2003~04년)를 계기로 한류 붐이 일어나, 일본에서는 한국의 드라마(현대물, 역사물)·영화·K-pop이 인기를 끌고 한국어 학습열도 높아져 도쿄 신오쿠보의 코리아타운도 번영했다. 그 이후, 한류 붐은 파도처럼 현재까지 계속되어 한국문화의 세련·고도화의 일본뿐만 아니라 넓은 세계에서 인정받고 있다. 또한 한국에서도 일본의 애니메이션이나 게임이 인기를 끌고 일본어를 배우는 젊은 사람도 늘어 일본식·일본술의 붐도 일어났다. 3년 전까지는 많은 관광객이 상호 방문하고(일본에 등산하러 오는 한국인도 많았다) 문화교류나 스포츠교류도 활발했다. 민중 단계의 교류는 확고한 것이 되었다고 말할 수 있다. 앞에서 언급한 전근대 대외관계사연구회와 한일관계사학회의 교류를 시작으로 양국 사이의 역사연구의 학술교류도 이 시기에 급속하게 진전되었다.

그러나 유감스럽게도 2012년 이후부터 정치적인 의미로의 한일관계는 악화의 방향으로 향했다. 이명박 정권 후반, 제2차 아베 신조 내각 발족의 시기부터이다. 박근혜 정권과 아베 내각의 사이에는 위안부 문제에 관련한 합의도 이루어졌지만, 문제인 정권과 아베 내각 사이에서는 한일관계는 더욱 악화되었다. 2019년에는 징용공에 관한 한국대법원판결에 대응해 일본정부가 한국에 반도체 소재 등 수출수속을 엄격화하고, 한국은 GSOMIA의 파기를 결정하는 등 일한관계는 「전후최악」이라고 부를 정도에 이르렀다. 실제로 관광객의 왕복은 줄고 한국에서는 일본제품의 불매운동도 일어났다. 게다가 추격을 가하듯이, 2020년에 들어서 신형 코로나 바이러스의 감염 확대에 의해 양국 사이의 사람 왕래가 좀처럼 없게 되었다. 올해(2022년)에 들어서 윤석열 정권이 발족하여 양국 관계의 개선을 목표로 하는 양상을 보이고 있지만, 예단할 수는 없다.

그러한 정치적인 양국관계의 악화에도 불구하고, 민중 단계의 동향은 다르다고 생각된다. 코로나에 의해 도항이 엄격히 제한되어 있지만, 올해가 되어 한국으로의 입국조건이 완화되어 도쿄의 한국영사관에는 비자취득을 위해 장사진을 이루었고, 게다가 비자면제, 입국 전 PCR 검사 면제도 완화가 진행되어 한국으로의 도항을 마음에 두고 있던 사람들이 도항을 시작하고 있다. 내가 가르치고 있는 학생들 중에도 관광 도항하는 학생뿐만 아니라, 어학유학으로 한국으로 건너가는 학생도 있다. 일본에서는 K-pop팬이 뿌리 깊게 존재하여 한국의 식품·화장품은 여전히 인기를 끌고 있으며, 최근 화제가 되었던 한국영화·드라마도 왕성하게 시청되고 있다. 나로서는 이러한 민중 단계의 교류가 크게 기대와 신뢰를 품고 있다.

5. 쓰시마

마지막으로 내가 연구 분야로서 때때로 방문하고 있는 쓰시마에 대해 이야기하고 싶다. 쓰시마는 일본의 규슈와 조선반도(한반도)의 사이에 있어, 예로부터 양국 지역을 잇는 역할을 하고 있었다. 일본에서는 「국경의 섬」으로 자리매김하여, 중앙에 의존하는 주변·변경적 성격을 가지고 있지만, 그 한편으로는 경계영역으로서의 국가·민족을 넘은 교류의 가

능성을 가진 경제적 성격도 가지고 있었다. 그 두 가지 측면의 성격은 고대부터 계속 시대의 변화에 있어 양상을 바꾸면서도 유지되어, 국가의 권력이 강대해진 근현대가 되어서도 그것은 변하지 않았다.

전후의 쓰시마는 국경방어를 위해 자위대가 주둔하고, 정부로부터 이도진흥(離島振興)을 위한 특별예산을 받아 도로정비 등이 진행되었다. 그 한편으로, 1990년대부터 많은 한국인 관광객이 방문하게 되어 대마는 그것을 적극적으로 받아들였고, 경제진흥으로 기여되도록 해왔다. 예를 들면, 요리점의 여주인(오카미)가 한국어를 배우고 한국의 내방객에게 일본무용을 선보이는 등의 노력도 했으며, 한국인 상대의 호텔, 음식점, 물산점 등도 만들어져 갔다. 쓰시마시 이즈하라에 있는 쓰마고등학교에는 국제문화교류과가 설치되어 한국어를 본격적으로 가르치고 있다. 쓰시마 출신의 학생 뿐만 아니라 일본 각지에서 부모가 사는 곳을 떠나 쓰시마에 와서 배우는 학생도 많으며, 졸업 후에 한국의 대학에 유학하는 학생도 있다.

에도 시대와 같이 쓰시마는 한국과 인접해 있기 때문에 활발한 교류가 있었던 한편, 종종 문제가 발생하는 것도 있었다. 2008년에는 쓰시마의 자위대시설의 인접지에 한국자본의 관광시설이 세워졌던 것을 시작으로 일본의 보수계 미디어가 「쓰시마가 점령되고 있다」 캠페인을 전개하여 국회의원이 참여하는 사태가 되기도 했다. 2020년의 쓰시마시장선거에서는 쓰시마가 한국인 관광객에 의존하지 않도록 원자력발전소 폐기물의 매립시설을 만들어 보조금을 얻어야 한다고 주장하는 우파계 후보가 도외에서 왔다(낙선). 또한 2012년에는 쓰시마의 코츠나칸논지(小綱觀音寺)의 불상 등이 한국인 절도단에 의해 도둑맞는 사건이 일어났다. 범인들은 한국에서 체포되어 처벌받았지만, 이 불상의 배 안에 한국의 부석사에서 만들어졌다고 하는 문서가 있는 것에서 부석사는 중세에 왜구에 의해 빼앗긴 것으로서 소유권을 주장하여, 한국 법원은 쓰시마에 건너간 경위가 증명되지 않으면 불상을 쓰시마에 반환하지 않아도 된다는 판결을 내렸다. 이 하나의 사건은 쓰시마 사람들에게 적지 않은 충격을 주었다.

2018년에는 인구 약 3만 명의 쓰시마에 41만 명의 한국인 관광객이 방문했지만, 앞에서 언급한 것처럼 2019년의 한일관계 악화로 인해 한국인 관광객은 격감하였고, 게다가 다음해의 코로나 사태로 인해 내방한국인은 거의 0명이 되었다. 이렇게 된 상황은 쓰시마의 경제에 심각한 타격을 주었다. 실제로 쓰시마에는 예전부터 이즈하라의 거리 중심에 넘쳐났던 한국인들의 모습이 없어 한산해졌고 망한 가게들도 조금씩 보인다. 언젠가 코로나 사태가 수습되었을 때, 한국인 관광객이 부활할 것을 기대하고 있다. 올해 4월에는 쓰시마박물관도 개관되었기에, 여러분의 쓰시마 방문을 권하고 싶다.

마치며

에도시대의 조일관계는 여러 가지의 모순·갈등을 걸치면서도 관계를 유지하려고 하는 힘이 우세했기 때문에 양국 관계자의 노력에 따라 2세기 반에 걸쳐 평화적·안정적인 관계

가 어떻게든 유지되었다. 그러나 막말유신기에는 일본 측에서 종래의 관계를 바꾸어 스스로 유리한 관계를 구축하고자 하는 힘이 우세하여, 조일관계는 크게 바뀌었다. 위정자의 태도가 양국관계 방향을 제시, 그것에 민중도 속박되어 갔다. 돌이켜 보아 근래의 한일관계의 급속한 악화를 고려했을 때, 막말유신기의 상황과 겹쳐보이는 것은 나쁜 것일까. 단 막말유신기와 현재가 크게 다른 것은 훨씬 광범위한 민중 단계의 교류가 있다는 것이다. 나로서는 한일관계의 미래를 향하여 그것에 기대를 걸고 있다.

이 30년간, 한일 역사연구자들의 교류도 각 단계에서 진전되었다. 교류기회의 양적인 확대만이 아니라, 이전의 의논과 비교해 최근에는 훨씬 치밀하게 사료에 기초한 실증적 연구의 성과를 근거로 하는 의논이 전개되고 있다. 양국관계의 현상과 미래를 고려하기 위해서도, 한일관계사의 연구에서 얻을 수 있는 것은 많다. 앞으로의 연구 교류가 보다 더욱 진전되기를 진심으로 기대한다.

〈번역 : 동국대 사학과 박성주〉